東日薬会報

発行所　北海道石狩郡当別町金沢1757番地　☎(01332)3-0301　直通・FAX　編集人　浜上尚也
北海道医療大学薬学部同窓会　☎(01332)3-1211　大学代表　発行人　山崎信彦
印刷所　㈱関西廣済堂／北海道営業所　札幌市白石区菊水二条1　☎(011)842-5510

東日薬設立20周年祝賀会開催

東日薬は昭和55年に設立し、本年で20年目を迎えます。東日薬も大学の発展とともに成長し現在では会員が3,000名を数えるまでになりました。

つきましては、下記の日時により東日薬設立20周年祝賀会を開催いたします。是非ご出席賜りますようご案内申し上げます。

日　時：平成11年7月17日(土) 18時より

場　所：ホテル札幌ガーデンパレス
札幌市中央区北1条西6丁目（TEL 011-261-5311）

会　費　1万円

申込方法：5月下旬に会員あてにご連絡をいたしますご案内の返信用ハガキをご使用下さい。

お問い合せ：北海道医療大学薬学部薬理学教室
浜上　尚也、遠藤　泰
TEL 01332-3-1211(内)3148　FAX 01332-3-1669(学内共通)
E-mail:hamaue@hoku-iryo-u.ac.jp（浜上）
:toruendo@hoku-iryo-u.ac.jp(遠藤)
同窓会ホームページからもアクセスできます
(詳細は本会報4ページをご覧下さい)

目　次

薬学部長就任挨拶 …… 2
退任にあたって …… 2
教授就任にあたって …… 3～4
総会のご案内・おくやみ …… 4
還暦を祝って …… 5
随筆 ー音別とダイオウー …… 6
新入会員名簿 …… 7
卒後研修のお知らせ …… 8
編集後記 …… 8

『薬学部長就任挨拶』

薬学部長
渡部　博之

平成10年4月1日付けで薬学部長を拝命し、学部内外の諸案件について教授会・研究科委員会の審議のもと学部運営に尽力しております。そうした中、平成10年10月26日に大学審議会は、一年にわたる調査審議の結果をとりまとめ、「21世紀の大学像と今後の大学方策について－競争的環境の中で個性が輝く大学－」と題する最終答申を公表しました。この答申は、18才人口が急速に減少する中、大学・短大への進学率46.2%という高学歴志向の高まりを積極的に受け止め、社会の活力ある発展を図っていこうとする視点に立ったものです。

今や大学淘汰の時代と言われております。益々競争的な環境が予想される状況下で、各大学・学部が格別の努力を求められている事は言うまでもなく、本学ならびに薬学部も例外ではありません。

欧米諸国に比べて質量ともに水準が低いと言われているわが国大学院の整備充実と改革は、焦眉の急を要する課題と指摘されております。大学院では、国際的な競争力のある優れた研究者を養成すると同時に、高度専門職業人の養成を図る事が強く求められております。ご存知の通り文部省は大学院の重点化構想のもと、国立大学の大学院大学化を着々と進めております。当薬学部ではこれらの動きに対応すべく、平成8年4月より大学院修士課程に、在来の薬学専攻(定員16名)に加えて医療薬学専攻(定員24名)を開設し、薬学的基盤を備え臨床の場で機能する薬剤師の養成を目指しております。こうした中、平成10年度として文部省の私立大学学術研究高度化推進事業の一つである「ハイテク・リサーチセンター」整備事業として薬学研究科のプロジェクトが選定されて約2億円強の補助金が交付され、同時に「大学院重点特別経費」として約1千万円の補助が決まりました。これも偏に薬学部全教員の教育・研究に対する熱意と成果の賜物であると思います。

一方、大学院教育と連携する学部教育の改善が叫ばれる中、当薬学部は学部教育の更なる充実強化を図るべく、在来の2学科を統合して「総合薬学科」を平成8年4月にスタートさせました。現在は学年進行中ですが平成11年度末をもって完成する事になります。しかし、学生の進路や学習の選択を幅広く認める弾力的な教育制度の実現を目指し、今後も学部レベルの改革も進めていく予定です。平成10年春の薬剤師国家試験の本学の合格率は、29私立薬科大学中の2位、また平成9年は1位であった事は教育に対する教員の真摯な態度と学生の勉学への取組の真剣さの結果と考えております。

ここで他学部の動きはと言うと、歯学部では卒直後研修の義務化への対応、看護福祉学部では大学院修士課程に続いて博士課程を平成11年4月から開設、と時代に即応した施策を次々と打ち出しています。また大学全体としては、今日の大学を取り巻く厳しい環境の中で、教育研究の質を維持し本学独自の個性・特徴を発揮しながらこの難局を乗り切るべく、「自己点検・評価」の実施とその結果の公表を道内私大の中でも逸早く行っていますが、これに引き続き「第三者評価機関による大学の外部評価」「教員評価制度」および「教員任期制」の導入を検討中です。更に現在、2008年完結を目途に、自己点検・評価で提起された諸問題を具現化する為「2008行動計画委員会」を組織して活動しております。

(1)少子化に伴って大学自身の手で新たな学生層を開拓する必要に迫られている。(2)厳しい環境の中で自主財源を獲得していかなければならない。これらの命題は本学を含めた私大の宿命とも言えるものです。どうか卒業生の皆さん、皆さんの子弟を本学に送りこんで下さい。この3月19日の卒業式では124名の22期生を世に送り、4月9日の入学式では26期生を迎えます。

また働きながら大学院に社会人として入学しませんか、大学は常に皆さんに門戸を開放しております。同時に、社会に向けては、病院薬剤師の定数配置について、後進の為にもその適正配置を我々と共に声を大にして訴えて行こうではありませんか。

以上、薬学部と大学の状況および大学を取り巻く社会の動きを紹介しましたが、今こそ、教学、法人、同窓会、全ての構成員が総力を結集させねばならない時期と考えます。一層のご理解とご協力を心からお願いし、就任の挨拶といたします。

『退任にあたって』

臨床薬理毒理学教室
齋藤　秀哉

北海道医療大学に2年間在籍し、薬学部の教授ならびに教官の先生方に大層お世話になりました。厚く御礼を申し上げます。お蔭様で無事に勤務を終えることが出来ましたことに心から感謝しております。

思いつくままに、この2年間の思い出を綴ってみたいと思います。医学部しか知らなかった私にとって、薬学部の先生方が教育に大変な御努力をされていることに感銘をうけました。4年生の演習試験、さらに卒業試験と進むにつれて、学生をぐんぐんと引っぱっていく迫力のある教育がおこなわれていることに感心しました。また、なによりも驚いたことは試験終了から試験結果の発表まで迅速におこなわれることでした。

また、1年間の学生諸君の教室配属という制度は、医学部にはなかったので、当初は戸惑いましたが、教官と学生との絆を強くするためには大変良い制度であると思いました。

教育について一番腐心したことは、講義の内容をいかにするかでした。全部で30回程度の講義回数で、臨床薬理学と毒理学の基礎・基本を正確に把握させることは、教える側にとっても教わる側と同じくらいむずかしいのです。薬理学は薬剤師国家試験のなかで多数出題されるため、私の分担部分は積み残さないように教えました。いかに学生諸君に理解しやすく且つ密度の濃い授業をするかに配慮し工夫したつもりですが、どの程度お役に立ったのか内心忸怩たるものがあります。

研究面では文部省の私立大学学術研究高度化推進事業である「ハイテク・リサーチ・センター整備事業」に対して、薬学部と歯学部から研究プロジェクトを申請し、2件共に採択された年に在籍しました。両学部の先生方の研究が国内外で高く評価されていることを示しています。薬学部では全講座が一致して、この研究費の申請に努力されました。学部全体が研究に積極的に取り組んでいて健全であると思いました。

私の研究について申しますと、薬理学教室の南　勝教授が継代繁殖していた脳卒中ラットをいただき順調に進めることができました。DHAの研究を木村真一助手、院生の玉山真由美さん、林彦一君と一緒におこないました。木村助手は、本年3月19日に薬学博士の学位を授与されたのであります。

教育・研究以外にも、2年間の間、春の「九十九祭」、薬学部教官の親睦のための「東風会」、全学の教職員の懇親会である「風恵会」に全部出席させていただき、何時も大変良い大学だなあと思いながら暮らしました。この2年間、楽しい思い出づくりをすることが出来ました。

このように貴重な数数の経験と楽しい思い出をもって、私はこれからの人生を歩んでいこうと思っております。

大局に立って北海道医療大学を見ますと、東日本学園大学の時代に比べて、大きく躍進したと思っております。今や全国屈指の医療系大学になっております。北海道では代表的な大学の1つであります。これからは「私立大学の雄」として、常に他の大学に先駆けて一歩前進していただきたいと希望しております。

私の恩師の一人である故真崎健夫先生は、大学は社会を照らす燈台の様でなければならないと言われました。まさしく北海道医療大学は道内のみならず全国の若者の進むべき道を指し示す燈台のように光輝いていただきたいと心から念願しております。

重ねて、在職中にお世話になりました教職員の皆様に心から御礼を申し上げます。

『教授就任にあたって』

医薬化学講座
片桐　信弥

昨年7月に本学に赴任し、はや9ヶ月が過ぎました。こちらに来たばかりの時は大変良い季節の時期で、私の住んでいる近くの百合が原公園には世界中のユリが咲いており、はじめてみるユリも多く感激した次第です。北海道での初めての冬もなんとか乗り切ることが出来、ほっとしております。今年の冬は例年よりも雪が多かったようで、雪には大変歓迎を受けてしまったと思っております。先日まで寒い日が続いており、まだ雪があちこちに残っておりますが、この原稿を書いている今日（4月12日）は気温が16度と暖かく、間違いなく春の到来が感じられます。北海道に来ての春もまた初めての経験です。決して春の到来が遅いとは思っていません。待ちにまったぶん、さぞかし本州の春とはひと味違ったすばらしい春が経験できると期待しております。

誰でも同じ心境だと思いますが、職場が変わるということは大変不安を感じるものです。大変失礼な言い方で申し訳ありませんがこちらに呼んでいただく前は本学についてはほとんど知りませんでした。例えば、本学が北海道のどこにあるのか、また大学院が設置されているのか等です。これはいままで23年間国立大で研究ばかりやってきた、いわば自分の大学しか知らない井の中の蛙であったのが原因の一つであると思っております。こちらに来てまず最初に感じたのは大変自然に恵まれていることです。人によっては田舎すぎていろいろな点で不便だと感じるかも知れませんが私には最適な環境です。また研究、教育にとっても恵まれた環境であると思います。また私のイメージとして一般によく言われるように私立の薬学部は国家試験対策のための教育がほとんどであり、従って研究を行うのは難しいのではないかと不安を持っていました。しかし、実際この大学は研究設備も国立大と比較し決して劣っていないこと、研究が大変盛んに行われていることを知りました。これも来る前の私の取り越し苦労であった様です。

こちらの学生に接してからまだ1年経っていませんが、第一印象として感じたことは大変勉強すること、従って基礎学力も相当高いことです。私は本学における教育に関してはまだ見習いの立場にありますが、学部の教育システムも実に充実しており、これが国家試験の合格率を常に全国トップレベルに維持している大きな要因であると最近感じております。ここまでレベルアップ出来たのは当然こちらに長くおられた諸先生方の試行錯誤しながらのなみなみならぬ努力の賜物であると感じております。国家試験の問題も年々その傾向が変わっていく中で、現状に即した教育を行い、これからもトップレベルが維持出来るよう貢献したいと思っております。一方、私学においても大学院の設置に伴い研究の面での充実もこれから重要視されると思われます。大学院に進学し、将来研究を志したい学生も多い様です。そう言う学生と研究のおもしろさ、厳しさを分かち合うことが出来ればこの上ない幸せと思っております。私の専門分野は合成化学であります。講座の名前が医薬化学ですから看板に即した研究、つまり有機化学を基礎として新反応を開発し、それを創薬に展開できればと考えております。この4月より新たに修士大学院生を4人迎えることになりました。楽しみにしております。院生の中には修士修了後、病院勤務を希望している学生もいる様です。創薬の研究は一見修了後の病院での仕事とは無関係のように思われます。しかし、大学院での研究はどのような分野であっても創造力を養うのが大きな目的であると思います。学部学生時代は知識を見につけ、大学院はそれを基に新しいものを生み出すところです。

国家試験の合格率をこれまで通り維持し、また研究の面でさらに注目される大学に発展する上で微力ながら貢献できればと思っております。

『教授就任にあたって』

薬品分析化学教室
黒沢　隆夫

平成10年4月1日付けで薬学部教授を拝命し、一年間が過ぎ、東日薬の皆様にご挨拶を兼ねまして私なりの教育、研究に対する抱負を述べさせていただきます。

日本の薬学教育は大きな変遷の時期を迎えつつあり、本学においても社会的要請あるいは時代のニーズにあった教育が必要となることはいうまでもありません。薬学は医療の一分野として社会にその成果を還元すべき宿命を負っている分野であり、薬学の知識、技術を習得した有能な人材を社会に送りだす義務があります。現今の高度な医療を目指した社会の動勢を考える時、より一層教育に携わる者の責任が重要となることはいうまでもありません。また、医療現場あるいは研究の場では、薬学出身者は、常に自己の知識・技術の能力をより高める努力が要求され、それを克服できる真の医療従事者、研究者が要求されると考えられます。これには薬学の教育に携わるものが、より高度な知識、技術を習得しようとする活力のある人材をいかに育成するかにかかっております。そのためには最新の知識、技術について講義することはもちろんのこと、いかに基礎的な知識を利用してより高度な領域に到達できるかということを理解させるかが、大変重要と考えております。薬学教育に携わるものの一員として、大学で学べうる限りの基礎的な知識、技術を駆使してより高度な医療、研究に到達できるような教育を心がけていきたいと思っております。また、大学に籍を置く教育、研究者の一人として、将来、本学の研究を担ってくれる人材を育成することも大きな義務の一つと考えております。

私は薬学の一研究者として、「生体内ステロイドの微量分析法の開発及び生体試料への応用」を目標に研究を進めて参りました。生体内に存在するステロイドはホルモンに代表されるような強い生理活性を有するものから胆汁酸のようにほとんど生理活性を示さないものまで多岐にわたりますが、これらは全て生合成されるため生体の機能に密接に関連しております。特に病態との関係を明確にすることは薬学領域において医療に貢献可能な題材と考えられます。現在は上記研究課題に加えまして、「脂質の代謝・調節とその関連酵素の疾患」との関係についての研究をはじめております。これらの研究を遂行する上では、標品の合成と分析法の確立や、生合成酵素の精製、及びその酵素反応の解析、さらに、生合成経路と病態時との関連解明を行わなければなりません。これらは有機化学、生化学、臨床化学等と密接に関連しており、各分野の境界領域を分析化学をベースとして定量的に結びつけることにより、基礎から臨床へと研究が広がり、さらに、その成果を直接的に医療へ還元できるものと考えております。従来の薬学は各分野ごとに膨大な研究がなされてはおりますが、それらが有機的に統合されたときに、はじめて薬学の特徴を十分に生かした研究がでてくるものと信じております。したがいまして、現今強く叫ばれていますチーム医療体制と同様に、これからの薬学における研究のシステムとしまして、できる限り多くの分野のメンバーからなるチームによる研究ができればと思っております。

終わりにあたり、今後とも皆様の一層のご支援をお願い致しますと同時に、東日薬の皆様の益々のご発展をお祈りしまして、ご挨拶に代えさせていただきます。

『教授就任にあたって』

薬剤学教室
齊藤　浩司

本年1月1日付けで、薬剤学教授を拝命いたしました。高田昌彦名誉教授に比べますと、体格、肝っ玉の太さ、お酒の量など、何をとっても小型化しておりますが、教室OBの方々を初め学内外からの暖かいご支援を頂きながら、なんとか頑張っております。北大病院薬剤部から助教授として着任しましたのが平成8年4月であり、日も浅くまだまだ経験不足の身でございますので、東日薬会員の皆々様には何卒宜しくご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

私は昭和28年に福島県のいわき市に生まれ、紆余曲折を経て昭和50年に北大理類に入学、54年に薬学部を卒業いたしました。卒業後はいわきに戻り地元の一病院薬剤師としてのんびりやろう位の意識しかなかった自分には、北大薬学部の講義は難しすぎ(?)てあまり興味を持てず、そのお陰で成績はまことに惨憺たるものでした。しかし4年時に現北大薬剤部長宮崎勝巳先生のご指導の下で卒業研究を行ったことをきっかけとして、そのまま北大病院に残ることになりました。当時の薬剤部長であられた北大名誉教授有田隆一先生の「薬剤師も科学者としての研究心・探求心を持たねばこれからの時代に生き残れなくなる」というお考えの下で、もう一度自分を根本から試してみたくなったというのが居残りを決めた最大の理由でした。それからは昼間は薬剤師としての待ったなしの日常業務、夕方から試験研究室で深夜遅くまで動物実験に明け暮れるという正に体力勝負の日々が続きました。そんな中で、試行錯誤を繰り返しながら少しずつ積み上げた研究成果がなんとか認められて、平成元年に学位を取得することができました。その後、平成4年7月に薬剤部を一旦退職し、8月から2年4ヶ月米国デュポン・メルク社の研究所にポスドクとして留学する機会を得ました。行ってみると、その研究所には世界中から選りすぐられたポスドクが60名近くもいて、日本ではまだ聞いたこともない最先端の研究がどんどん展開されているという凄い組織でした。大した研究実績も無い自分が、一流の研究者が集うそんな組織の中でやって行けるのか自信は全くありませんでしたが、年に一度行われるポスドクの研究発表会で私の仕事が2年続けてトップ3に選ばれるという栄誉を得ました。ひたすらにそしてがむしゃらにやって得たこの時の経験と成果が、現在薬剤学教室で若い大学院生達と一緒に取り組んでいる研究のベースになっています。研究テーマの詳細は割愛させていただきますが、昨今の薬物療法の大命題である医薬品の適正使用に向けて、少しでも役立つ知見の収集を目指して活発な研究を展開しています。医療の現場は離れても、研究に取り組む視点はあくまで薬剤師の立場に置き、OBの方々ともいろいろな情報交換をしながら、幅広くテーマを追究して行きたいと考えておりますので、今後薬剤学教室を積極的に有効利用していただければ幸いです。

今全国の薬系大学に目を向けますと、その生き残りを賭けて薬剤師教育に取り組む戦略の一環として、医療現場の経験を有する教員を次々に誕生させ、その一方で学内実習施設の充実を積極的に推進しているところが増えています。10年後、20年後においても本学が私立薬系大学の雄として全国にその名を馳せて存在するために、今自分は自分の立場で何をすべきかについて、新旧を問わずすべての教員が真剣に自問自答し、一致団結して事に当たらねばなりません。東日薬の会員の皆様の後押しが必須なのは申すまでもありません。

私事で恐縮ですが、郷里に住む今年小5の姪が、「大きくなったら伯父ちゃんのいる大学で勉強したい」と健気(?)にも言ってくれています。ただ本人の興味が今のところ薬剤師よりも看護婦のほうにあるらしいので、薬学部の教員たる伯父としてはちょっと複雑な心境ですが、将来この姪が北海道医療大学の1学生として当別の地で学ぶ日が来るのを心待ちにしながら、私も精一杯頑張る所存です。

最後に、会員の皆様の益々のご隆盛とご健勝をお祈り申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

第20回 東日薬総会(医療薬学セミナー)開催のご案内

第20回東日薬総会を下記の通り開催いたします。本年も医療薬学セミナーをあわせて開催いたします。会員の皆様の多数のご参加よろしくお願いいたします。

記

日　時：平成11年6月12日(土)

- 札幌支部総会：16:30～17:00
- 東日薬総会：17:00～18:00
- 講演会(医療薬学セミナー)：18:00～20:00
  「薬剤師と法律」
  北海道医療大学基礎教育部
  久々湊　晴　夫　教授
- 懇親会：20:00～
  会費　3,000円(当日申し受けます)

場　所：きょうさいサロン
札幌市中央区北4条西1丁目　共済ビル
TEL (011) 241－2661

4月下旬に別途送付するご案内の返信用ハガキにてご出席の有無を5月31日までにお知らせ下さい。総会欠席の方は委任状の記入もあわせてお願いいたします。
また、この講演会(セミナー)は日本薬剤師研修センター認定対象研修会(1単位)です。

同窓会ホームページ開設

東日薬ではホームページを開設いたしました。大学のホームページからアクセスすることができます。東日薬のURLは以下のとおりです。

http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~phalumni/

まだ立ち上げたばかりなので内容は未熟ですが、会員への情報や同窓会への意見交換の場にしたいと考えております。今後はホームページ管理運営委員会(仮称)をつくり、管理と運営をお粉って行く予定です。会員の皆さまからのご意見やご要望をお待ちしております。皆さんどんどんアクセスしてください。

訃　報

本学名誉教授　伊藤昌明先生が平成10年11月17日にご逝去されました。謹しんでお悔み申し上げます。

還暦おめでとうございます。

薬化学教室教授 町田實先生と、森洋樹先生が還暦をお迎えになり、お祝いの会が開催されました。

町田　實教授 (昭和14年3月9日生)

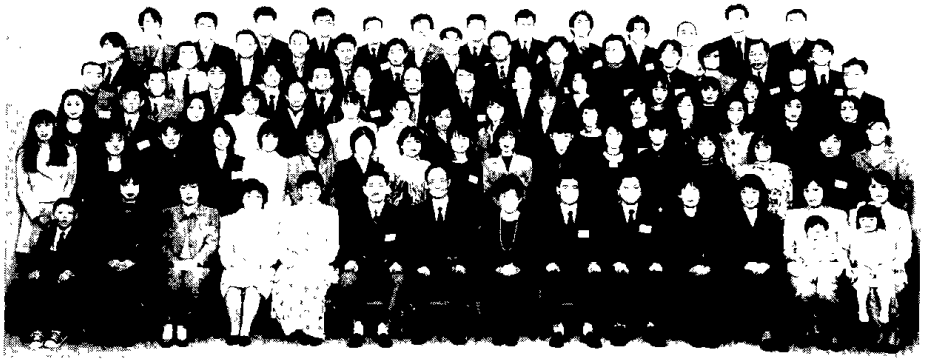
昨年の11月22日、札幌ガーデンパレスにおいて“町田實教授の還暦を祝う会”が盛大に開催されました。当日は、発起人の皆さんのご努力により全国各地から薬化学教室（旧薬品製造化学教室）でともに学んだ卒業生（1～21期生）、在校生（22期生）をはじめ旧職員等多くの方々に御参集いただきました。司会進行は1期生の狩野さんにお願いし、同じく1期生の東さんの開会の辞、乾杯の音頭で祝宴が始まりました。卒業生を代表して2期生の中村（旧姓北村）さんから贈られた花束、同じく2期生の館内（旧姓親泊）さんから贈られたお祝いのマフラーを胸に、町田教授から大学開学から講座開設に至るご苦労、そしてそれ以後20余年に渡る数々の珠玉の思い出をお話いただきました。相変わらず記憶力の衰えない町田教授のお話に出席者一同「還暦とは思えない、まだまだ充分お若い！」の感を強くしたご挨拶でした。次に卒業生各期生毎に壇上で、一人一人自己紹介、近況報告、在学当時の思い出などをお話いただきました。大きな病院薬局で中心となり活躍する人、自分で調剤薬局を開設し毎年店舗数を順調に増やしている人、現在子育て奮闘中で薬剤師休業中の人等、全国各地で活躍する卒業生のお話しに町田先生は特に感慨深いご様子でした。またパーティの各所で在校生と卒業生、卒業生同士の会話の輪ができ、近況報告や情報交換等が行われ、別の意味でも有意義な会になりました。このような盛り上がりの中で卒業生の中から、今後も定期的に町田先生を囲む会を持とう機運が高まり、現在具体案を立案中と聞いています。会は順調に進み、続いて8期生山本（旧姓今井）さんによる卒業生からの祝電披露、旧職員の大野先生（病態生理学）、武智先生（基礎教育部）、石田（旧姓草刈）先生のお祝いの言葉をいただきました。このようにして瞬く間に楽しかった2時間余りが過ぎ1期生の中村さんの閉会の辞で盛会裡に会の幕を閉じました。閉宴後、ホテル出口でタクシーの中で全国の卒業生から贈られた数多くの花束に囲まれた町田教授をお送りし、出席者は各期生毎の2次会へと夜の札幌に散っていきました。

（薬化学教室助教授　小田和明）

＊写真は卒業生を代表して2期生の館内（旧姓親泊）さんからの記念品贈呈

森　洋樹教授 (昭和14年3月26日生)

3月26日のお誕生日で還暦をお迎えになった免疫微生物教室（旧微生物薬品化学教室）森洋樹教授の「還暦を祝う会」が、平成11年2月27日札幌ガーデンパレスにおいて森先生御夫妻をお招きして盛大に開催されました。祝賀会には在校生を含めて95名の卒業生や旧職員の方々が御出席されました。また、ご都合悪く御出席いただけなかった方々からも、多数の祝電や花束が届けられました。大勢の懐かしい方々が一同に会した中で森先生と門下生との歓談が続き、瞬く間に2時間が過ぎてしまいましたが、森先生におかれましては、同門生やそのお子様達に囲まれて大変お幸せのご様子でした。2次会には森先生もご参加になり、祝賀会の後も大いに盛り上がりました。その後3次会、4次会とススキノが賑わったようです。同門生におきましても期を越えて親睦を深める良い機会になったようです。「森洋樹教授の還暦を祝う会」がきっかけとなって、今後も同門生の親睦を深める機会を多く持ちたいと考えております。



最後になりましたが森洋樹教授のご健康と益々のご活躍を御祈念申し上げます。

免疫微生物同門会会長 井盛勝彦（1期生）

随　筆　「音別とダイオウ」

名誉薬用植物園長
縣　　功

本学が開学して暫くは音別に教養部があった。本学に入学した学生はまづ全員音別の地で過ごした。音別は釧路から40km札幌よりの道東の地である。道東地方の特色は冬にあまり雪が降らず雪が積もらない。しかし気温は低く凍てつくような寒さである。その寒さは雪に保護されていない地中の水をカチンカチンに凍らせ春までに地下50cmくらいまで凍結させてしまう。春が訪れ暖かくなると土の中の氷が解け出し蒸気となって地面から沸き上がってきて春の野を一瞬のうちにモヤで包んでしまう。あたり一面のモヤの中を歩いていると目の前に突然人が現われて驚かされる。車は晝でもライトを付けないと危険である。そんなモヤの中を学生等は寮から大学まで通って勉学に勤しんでいた。体育の時間に野球をすればボールがモヤの中に消えていった。その頃音別の名産の2米にもなりその茎の下にコロポックルが住んでいるというフキの芽、フキノトウが芽を出し春の訪れをつげる。料理して食べるとホロニガイ味がなんとも言えない。フキノトウに発ガン物質があることを発見したのは本学の羽賀先生である。フキノトウは少し食べても良いがあまり多く食べてはいけない。植物研究部の学生が植物採集に出かけお土産にと言って黄金の花をつけたフクジュソウを持ってきてくれた。手わたされたフクジュソウの根はカチカチの氷土の中にあった。そして学生が採集に使ったという特製の0.5cmの厚さの鉄のシャベルが90°に曲っていた。それほど土は凍っている。その土の氷が解けるのがモヤが出なくなる6月終り頃である。その頃セグロセキレイが美しい羽を羽ばたかせ舞っている。男子寮と女子寮は向いあっていた。そして太平洋が打ちよせる海岸がすぐ近くにあり、仲良くなった学生等がアベックで波打ちぎわの砂地を歩いて行く、そのあたりで海釣を楽しむ学生もいてよく大きなコマイを釣っていた。夏でも音別は気温が昇らず肌寒い日が続く。その頃道東の花があちこちで爛漫に咲きほこる。2学期が始まる頃音別は毎日の様に青空が広がり、丘に登ると太陽の光に海の波が反射してキラキラと輝きカモメがあたりを飛び交い自分がシスレーの絵の中にいる様である。その素晴らしい天気はずっと冬も続く。

この音別の大地が非常に好きな薬用植物がある。漢薬の王様とも言えるダイオウ類である。音別には木村先生が富山大学薬草園から持って来られたタングトダイオウ、その他チョウセンダイオウ、マルバダイオウがあった。タングトダイオウは中国のタングット地方に自生している綿絞大黄の一種である。チョウセンダイオウは朝鮮に自生している日本薬局方のダイオウである。マルバダイオウはそれに反して薬用にはならない。しかしその葉柄をジャムにしたり、サラダにして使われている食用にするダイオウで食用ダイオウとも言われ、市場ではルバーブとして売られている。栗山町の岩崎英伯さんがアメリカのオレゴン州からマルバダイオウを取りよせ、現在栗山町で生産し出荷している。自らはルバーブ入りのチーズケーキを作り、美味であるという。この3種が音別の薬草園に植えられていて薬草園を管理していた渡辺隆俊さんが育てていた。音別の厳しい自然環境の中でこの3種のダイオウは素晴らしく大きく生長した。葉の大きさは1mほどになり花を咲かせるとその花茎の高さは2.5mほどにもなった。一株で1m×1mの広さに植えて、その大きさで一株しか生長できない広さである。その根茎や根は非常に太くなり根が直径10cmほどにもなる。一株を堀りおこすと1m×1m×1mの箱に一株しか入らないほど生長する。それほどダイオウ類は音別の自然が好きなのである。当別に薬草園を移したときダイオウも当別に持ってきたが、夏の暑さにダイオウはまいってしまい根茎や根の生育が悪くとても当別ではダイオウの生産地にはなり得ない。音別地方こそダイオウ類の最適地なのである。植物によってその適地は異なるが同じ北海道の当別と音別とで、これほど生育の異なる植物もめづらしい。戦時中木村先生の所に漢方医が訪ねて来て、今どこにもダイオウがない。自分に見ている患者でダイオウを飲ませれば病気が良くなる。是非大学で使っているダイオウの標本を分けて下さいと言ってきたので先生は分けてあげたという。それほどダイオウは重要な漢薬である。ダイオウは多数の漢方処方中に配合されており、その重要性ははかり知れない。ダイオウは瀉下作用、抗菌作用、抗精神作用、鎮痛、消炎作用、抗腫瘍作用、窒素代謝改善作用が知られてきている。

もし皆様の中でダイオウ類の栽培を目指す人がいるなら音別でそれを行なってほしい。もし皆様方がダイオウの栽培の適地を聞かれたら薬剤師として胸をはって音別を教えてほしい。皆様方が青春を過ごした大地が漢薬の王様ダイオウの生育の適地であったということは何とも楽しいことである。

(写真は本学薬用植物園で栽培のカラダイオウ)

―国家試験― 新卒者合格率堂々のトップ!!

3月27、28の両日第84回薬剤師国家試験が、本学をはじめとする各会場で行われました。

今春卒業した124名と既卒の46名が受験し、141名（82.9%）の方々が合格しました。新卒者124名に限りますと、98.4%の合格率で全国平均86.2%を大きく上回る好成績をおさめ、全国の薬学部のある46国公私立大学の中で第1位という輝やかしい結果でした。

合格者の皆様、合格おめでとうございます。今後のご活躍を大いに期待しております。

卒後研修のお知らせ

下記の日程で医療薬学会公開講座及び医療薬学セミナーが開催されます。
お近で開催されますセミナーにご出席いただきますよう、ご案内致します。

講座名	開催日	時間	場　所	演　題	講　師
医療薬学公開講座	11月13日(土)	14:00-16:00	朝日ホール	ファーマシューティカルケアと医薬品情報	望月　眞弓（千葉大学大学院薬学研究科助教授） 板谷　幸一（札幌医科大学医学部教授・薬剤部長）
医療薬学セミナー	5月2日(日)	16:00-18:00	小松（グランドホテル）	最近の薬毒物をめぐる社会状勢と薬剤師の役割	阪田　正勝（本学薬学部教授）
	6月12日(土)	18:00-20:00	札幌（きょうさいサロン）	薬剤師と法律	久々湊晴夫（本学基礎教育部教授）
	9月18日(土)	18:00-20:00	宇都宮（ホテル東日本宇都宮）	医療と有機化学	町田　實（本学薬学部教授）
	9月18日(土)	18:30-20:30	青森（ホテル青森）	薬物誘起性嘔吐と制吐薬	遠藤　泰（本学薬学部講師）
	10月2日(土)	17:00-19:00	歌登（歌登グリーンパークホテル）	能動的患者情報の収集と服薬指導	齊藤　浩司（本学薬学部教授）
	10月16日(土)	18:00-20:00	釧路（釧路パシフィックホテル）	生薬のポリフェノールとがん予防	西部　三省（本学薬学部教授）

なお、医療薬学セミナー終了後には講師の先生を交えた懇親会も予定しておりますので、そちらにも是非ご参加下さい。

「編集後記」

北海道にもやっと桜前線がやって来ました。桜の便りに乗り喜ばしい便りも届きました。先日の薬剤師国家試験の合格発表で、我が大学は新卒の合格率98.39%で全国1位の輝かしい成績をおさめました。

さて東日会報15号を皆様のお手元にお届けいたします。現在、東日薬本部では業務の円滑化をはかるために担当業務を役員で分担しております。次号の会報には掲載する予定です。今回の会報は野地理事を中心に構成や編集を行い作成いたしました。大変お忙しい中原稿をお寄せいただきました先生方ありがとうございました。お礼申し上げます。さらに3月には待望の薬学部同窓会のホームページを開設いたしました。こちらは遠藤副会長が中心となり作業を進めました。一度アクセスしてみて下さい。今までは本部からの一方的な情報にとどまっておりましたが、これからは皆様からの情報もお寄せいただけることと思います。本年は同窓会設立から20年です。これを記念し7月には祝賀会を開催します。久しぶりになつかしい顔を合わせませんか。会員の皆様お誘い合わせのうえご参集下さい。祝賀会にあわせ同期会を開催するのも結構では？

次の会報は本年秋に発行予定です。皆様楽しみにお持ち下さい。

浜上　尚也（9期）

原稿募集

東日薬会報編集部では会員の方々からの投稿を期待しております。
随筆、紀行、文芸、学術、提言および大学への注文など2000字程度でお願いします。
写真原稿も大歓迎、カラーでもかまいませんが白黒の方が印刷の都合上より鮮明になります。ピント良好のものをお送りください。
「伝言板」、「支部、クラス会だより」
クラス会、支部会の開催通知、尋ね人などというような身近な問題、話題などのコーナーを設けました。会員の皆様にフルに活用して頂きたいと思います。
さらに、支部会、クラス会などの集会がありましたら、是非その記事をお送り下さい。到着順にすべて会報に掲載いたします。
本文は2000字程度まで、写真や寄せ書きだけでも結構です。
原稿は、市販の四百字詰用原稿用紙に手書きでもワープロ（20×20）でもかまいません。
なお、掲載した原稿は原則としてお返ししません。
また、内容によっては返却する場合もありますが、採否は編集委員会で決定させて頂きます。